

■ エッセイ

ESSAY

第3回

# ある地域人の生活観察 「地の人のコミュニケーション」の話

● Text : kana yamagishi

山岸 加奈

フリーライター

ガソリンや日用品の価格が上昇し、さらに食料品も徐々に値上がりしてきているのが現状です。私も含め賃金格差で悩む弱者の立場の方々は、生活費も確保できないような中で、果たして全く社会的に立場を確立できず、混沌とした気持ちでいる方も少なくないかと思えます。

前回6月号に「大切なことは、地域ごとの尺度で財政確保につながるものを見だし、地域独自の運用を心がける、すなわちライフプランを描くことにあるかと思われまます」とさらっと書いてしまいましたが、現実はそのように簡単なお話で済むはずがないと、悩んでいます。

社会政策のゆがみにより社会的弱者が起きている状況、つまりマイノリティの意見を、どのような方々に伝え託していけば、人と人をつなげる取り組みやしくみへと展開し、地域の尺度（ルールや習慣）となり、そうした状況を改善していくことができるのでしょうか。その解答を私は見つけきれてはいません。

今回は、人と人をつなげる取り組み以前に、マイノリティの意見を日常的に話し合う魅力的なコミュニケーションについて、私なりにお伝えします。

## イタリアでのコミュニケーション

イタリアに調査に行った際、親しくなったコムーネ<sup>\*1</sup>の職員の方が、議員当選のお祝いパーティに私を誘ってくれました。彼の友人である小さな小さな町の議員さんは、私と変わらない年代（30代半ば～40歳）の女性でした。その議員のために、町中の子供からご老人まで総勢100名ほどが、外に設置した長いテーブルとイスで、会食し始めていました。まるで身内の結婚式のようなお祝いパーティに、日本人の私が飛び入り参加したのです。

イタリアではそうした場面でしとやかにおとなしくしているのは、女性であっても大変失礼なことにあたります。そこで、私がなぜイタリア語が普通に話せるのかから、調査対象のシエナの町の歴史やイタリア料理の話、私の故郷の札幌の話まで、自分の身の上話をしました。

すべてのイタリア人がそうであるとは言いませんが、場面ごとに初対面でも会話が普通にうまれることが当然なのです。30分間の電車の移動であれば、隣の席のおばさんと「今日はずいぶん雨がひどくて、蒸し暑いわね」といったたわいもない会話。八百屋のおじさんと「その野菜の生産者、食べ方」の話。パール<sup>\*2</sup>ではアペリティーボ（食前酒）を片手に、「その地域の政治・制度」の会話。

イタリアで経験したコミュニケーションの最も重要な

ことは、「初対面の段階で自分のことを相手にどの程度表現できるか」であり、「自分がどの程度のかをその相手と形成したいのかを伝えられること」でした。無論、この定義は私の独断ですが、自分から壁を作ってしまう方、人見知りする方、話すことが苦手な方、徐々に付き合いを深めたいという方は、イタリアでの生活には適さないかもしれません。

イタリアから日本に戻ってきた頃の失敗談です。まず自分のことを相手に伝えようとし、相手の話を聞いていなかったことで、「よけいなことを話さない、無駄な会話を控える」ように諭されたことがあります。今では当然のことだと思うのですが、信頼を得るコミュニケーションのあり方とは、「誠意を持って相手の話を聞いて理解し、主張しすぎず、分かち合えること」であると痛感しています。

### 方言と標準語

九州で私が話をしていたときに、「こちらの方ではないですね?」と幾度か尋ねられたことがあります。北海道弁のイントネーションや言葉がつい出てしまうと、羞恥心を感じてしまいます。

しかし、九州人はまったく逆の認識のようです。九州の方々は、初対面の私にでも、福岡弁、大分弁、熊本弁、鹿児島弁等で話をします。さらに、福岡市内でも各区や地域によって微妙に方言の違いがあるようです。島国という点では北海道も九州も同じですが、九州は各県間での闘争心があるらしく、郷土愛を無意識の中で主張しているように思えてなりません。後々話を聞くと、九州では郷土の方言で話さず、標準語を話す方は、ちょっとすかした人と思われているようです。

九州では男女問わず普通に、建前の話を飛び越えて、自分のプライベートや愚痴、ぶっちゃけ話を話す方も多いかもしれません。イタリア人と同じように人との距離感が近く、正直、どこまで、どのように相手に話をすればよいか、わからないとき、苦手に感じる 때가私には度々あります。刺身醤油や料理のダシが濃ゆいように、人間関係が濃ゆいなあと感じます。

### 九州人は行政からの自立化を目指す

地元の新聞に、「全国の観光協会は市町村合併に伴う統廃合が進み、会員減や補助金減による財政不足が顕著化している。観光協会の意思決定のスピードが

※1 コムーネ (COMUNE) : イタリアの自治体の最小単位「基礎的地方自治体」をさす。イタリアでは市町村の区別はなく、大小の別なく一律コムーネである。

※2 パール (Bar) : 簡易食堂・喫茶店・酒場 (バー)。

遅くなり、事業展開の遂行能力も欠けている。行政に頼らない「“観光協会の再生と自立化”」が急務である。その



大豆畑トラスト交流会：赤いそら豆の取り出し、みそづくりを行いながら、初対面同士でもすぐに会話が弾む

ためには、自主事業の展開、財源の確保、キーマンとなる人材の誘致、組織体制の強化が欠かせない」と掲載されていました。

地元の人たち(地の人たち)が、地域活性化に向けて自分たちが何の役割を担うべきなのかという課題を感じ取り、自らに明解なテーマを設定しようと、活動目的を検討している一つの例に思えます。また、地元の新聞記事には毎日のように、行政へ依存することのない地の人たちの日々の奮闘が伝えられています。こうした記事から、人と人をつなげる取り組みやしくみは、濃ゆい人間関係の中からこそ見出すことができるのではないかと感じ始めています。

### 九州人と北海道人

札幌から福岡へと生活を変えたことで、認識できたことがひとつあります。九州では、地の人、地元企業、財界人が「地域の担い手(主役)」として、行政に依存することがない適度な緊張感を持ちながら日々の活動を展開しているように見受けられます。

言い換えると「北海道はあまりにも行政主導型で物事を決定し進めているところがある」ということです。行政の計画だけでは埋められない「人と人をつなぐ取り組みやしくみづくり」を担う意識を、北海道人も強く持つべきです。そのためには、自分たち自身が地域活性に向けて何ができるのかを問い続けるとともに、行政に頼らない自立化を促していかななくてはならない。また、揺るぎない郷土愛を持つ地の人同士のコミュニケーションをもっともっと濃いめにすべきであると思います。

### ● Profile

山岸 加奈 やまぎし かな

札幌生まれ、福岡在住。フリーライター。イタリア国立フェラーラ大学建築学部留学、北海学園大学非常勤講師、北海道景観審議委員、北海道大学博士後期課程満期退学を経て、福岡に住む。おいしい食べ物と飲み物を求め、いろんな人との対話を持ちながら、お金では買えない豊かな生活を送ることが何であるのかを考える。